

日本体育学会及び第30回記念大会の デザイン統合プロデュース

森 嘉紀・若山 博・服部光彦

〔I〕 はじめに

日本体育学会第30回記念大会開催を契機に、学会シンボルマーク制定の機運が生まれ、同時に第30回記念大会運営にあたってのコーディネーションが不可欠要因になった。そこでそれらの企画立案から制作に至る、トータルプロデュースを日本体育学会より要請された。本稿は、その発生から経過、完了に至るプロセスの概要を述べるものである。

〔II〕 日本体育学会シンボルマーク

A 日本体育学会の概要

目的——体育に関する科学研究ならびにその連絡協同を促進し、体育学の発展をはかり、さらに体育の実践に資することを目的としている。

事業——①学会大会の開催
②研究会、講演会の開催
③機関紙「体育学研究」、会員名簿の刊行ならびにその他の出版。
④会員の研究に資する情報の収集と紹介。
⑤研究の学際的および国際的交流。
⑥その他本会の目的に資する事業。

大会——学会大会は毎年1回以上開催する。

会員——①正会員 ②名誉会員 ③特別会員 ④賛助会員 以上の種別となっている。

役員——①会長 ②副会長 ③理事 ④評議員 ⑤監事 で任期は2年、2重任は妨げない。
現会長は水野忠文氏である。

会議——総会、評議員会、理事会となっている。

事務局——東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館内にある。

会員数——正会員4,188名 特別会員18名

賛助会員16名 購読会員94名である。(55年9月1日現在)

専門分科会——体育原理、体育社会学、体育社会学、運動生理学、体育管理、発育発達、評定評価、体育方法、保健、体育科教育学の10分野となっている。

経費——収入の部 26,470,403円

(入会金、会費、利子、文部省刊行補助など)

支出の部 23,044,395円

(運営事務費、人件費、刊行費、専門分科会費、国際交流費など)
次期繰越金、3,426,008円である。

B シンボルマーク制定の背景

シンボルマーク制定の必要性が論じられる背景には、

①先づ、学会そのものの活性化があげられる。上記の通り4316名の会員を擁する学会は、国内は勿論、海外をも含めた広い範囲での活動にも増して、諸学会、諸団体との活発な交流が頻繁になり、今後増々そうした発展的情況が予想できること。

②活動の活発化に比例して学会報をはじめ、会員相互のコミュニケーション媒体や一般刊行物が増加し、それらは学会内のみならず学会外に於ても、社会的定着を見るに至ったこと。

③学会の定期総会が定着し、その内容、形式共に充実の一途にあり、それらに対する視覚的“核”が必要になってきたこと。

④諸学会あるいは類似名称団体、企業との明確な視覚的差別化が望まれてきたこと。

⑤会員であることを明示する会章の存在が望まれてきたこと。

等の現状分析を踏まえ、それら諸要因に充分対応でき、且つ又先々に於ても有機的に活用でき

るシンボルマークを目指した。

■ デザインコンセプト

《Image Criteria》

前述学会コンセプトに基づく、シンボルマークのデザインコンセプト設定で、種々な資料収集分析を重ねた結果、イメージのテーブルからは

- ① 人間性——humanity
- ② 健康——healthy
- ③ スポーツ——Sporty
- ④ 愛——love
- ⑤ 学問——learning

の5つのキーワードを抽出した。

①は当然のことながら、外的内的意味を包括した上での「人間」そのものを対象に学求するグループであること。

②人間の理想的状態である広い意味での「健康」の追求を基盤にしているグループであること。

③人間の諸能力をあらゆる角度から研究し、「体育」を通して人間の可能性を追求するグループであること。

④それらは取りも直さず普遍的人間「愛」に裏打ちされた、いわば非常にベーシックな行為であり、グループであること。

⑤利潤追求団体ではなく「学問」体系を目指すグループであること。

等の背景に起因している。

《Functional Criteria》

一方、使用面から考察してみると

●現在そのシンボルマークの展開範囲（アプリケーション）が予定されるのは、主としてプリント媒体であり、今後もその状態は継続するものと予想される。

●各々の定期総会に於て、総会開催中に限って使用される短期間用のアプリケーションエレメントが生じる。

等の状況を踏まえ、具体的な機能クライテリアとして

- ① 再現性——reappearance
- ② 柔軟性——flexible
- ③ 適応性——adaptability
- ④ 独自性——distinctive
- ⑤ 不変性——timeless

⑥ 国際性——international

の6ポイントを設置した。

①は縮小拡大のプロセスにおいても、イメージに変化がないこと。特に、最小天地1cmの縮小にも充分耐えうること。

②その他のベーシックエレメント（学会名、本部所在地名等）が、何如様にシンボルマークにジョイントされても適応できる、使用上の柔軟性があること。

③シンボルマークの固定色（シンボルカラー）は設定せず、従って何色で表現されても良い形象であること。

④その他の諸学会あるいは類似団体、企業等とは明確に異なる独自性があること。

⑤時代の経過にも充分耐え、いつ迄も新しい要素を保持していること。

⑥日本社会の国際化、学会の海外交流による国際化に鑑み、そうした環境に対応できる国際性を保持していること。

である。

■ シンボライゼーション

以上のデザインコンセプト設置の後、具体的な表現アイデアの抽出作業に移行した。

①イメージクライテリアの各要因の中からできる限り多くのデザインモチーフを抽出した。

②抽出したモチーフを具体的な形象でシンボライズしていった。具体的な形体を持たない抽象概念モチーフも、そこから間接的にイメージできる状態、形象をシンボライズした。

③上記②で抽かれた図形を造形的審美観の角度から整備した。

④aという単一モチーフから具体的に図形化されたものを a_1 、その図的バリエーションを a_2, a_3, \dots 、同様に b_1 、そのバリエーションを b_2, b_3, \dots 、とする。

⑤第2ステップとして $(a_1 + a_2)$ あるいは $(a_1 + a_3)$ 等の様に、同類項でのミキシングによるシンボライゼーションを行った。

⑥第3ステップは $(a_1 + b_1)$ あるいは $(a_1 + C_1)$ 等の様に異種項とのミキシングの可能性を求めた。

⑦第4ステップでは $(a_1 + b_2 + C_5)$ 等の様に、

三種項のミキシングを行った。

⑧第5ステップでは、第2ステップで形成された図形と第3ステップで形成された図形とのミキシング、あるいは第2ステップの図形と第4ステップの図形とのミキシング等、不特定項のミキシングを追求した。

⑨単一モチーフから抽出した図形及び、第2ステップ～第5ステップで描出した多くの図形の中から、造形的審美観で10案をセグメントした。

⑩セグメントした10案各々の線、面を修正、整理した。

E デザインコンセプトへのフィードバック及び試作

①10案を各々 Functional Criteria に照合し、6案を排除し残りの4案を候補案とした。

②候補案4案について、細部に渡る造形上の修正を行い、各々直径20cmの試作を行った。

③この段階から、使用者である日本体育学会及び実行委員会との連携を持ち、4つの試作案を再度 Image Criteria. Functional Criteria に照合した。

F シンボルマークの完成

デザインコンセプトの各々の要因を平均的に

クリアーした1つの案が、シンボルマークとして正式に誕生した。

次に色彩について考察した。すでにシンボルマークデザインコンセプトにおいて『現時点では不確定要素が多いので、固定色を設定せず、逆に色彩に対する適応性を計る』としていたが、形象が誕生した時点で再度、色彩について検討したのである。結局、ベーシックエレメントとしての所謂イメージカラー、シンボルカラーについては、

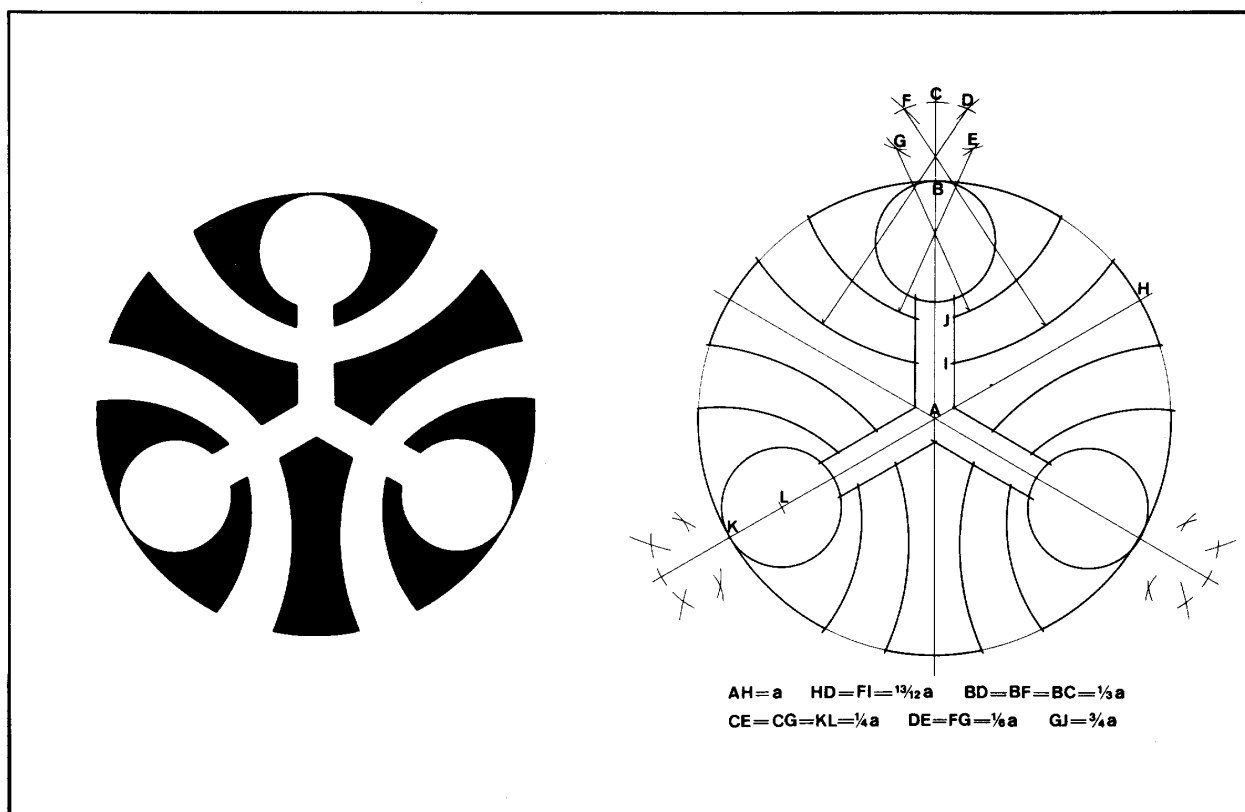
●企業体の様な「競合に基づく差別化の必要性」程の意識は不要である。

●各エキジビション毎に、あるいは各大会毎に色を選定した方が、そのエキジビション及び大会のオリジナリティーが生かせる。

●例えシンボルカラーを決定しても、今後その使用についての管理が、現在のところむづかしい。

●従って、学会としてのイメージはシンボルマークの形象のみで象徴させる。

等の理由で、シンボルカラーは敢て固定しないことになった。



〔Ⅲ〕 日本体育学会第30回記念大会デザイン統合

■ A 日本体育学会第30回記念大会概要

日本体育学会第30回記念大会は昭和54年10月11・12・13日の3日間、金沢大学、石川県青年会館、石川厚生年金会館を会場として開催された。外国からの特別参加も含め約2500名の参加があり、30回記念大会として多彩な次の行事が催された。

- ①甲南女子大学鰐坂二夫学長の文化講演。
- ②国際保健、体育、レクリエーション学会長ヘベリング博士 (M. Hebbelinck), 同事務局長トロエスター博士 (C. A. Tresterjr), 国際バイオメカニクス会長ネルソン博士 (R. G. Nelson), 岸野雄三教授 (筑波大学), 石河利寛教授 (順天堂大学), の5博士を演者とする国際シンポジウム。
- ③トロエスター博士の特別講演
- ④日米両国の学会交流に関する協約についての調印式。
- ⑤日本体育学会シンボルマーク制定。
- ⑥学会に関する功労者及び永年協賛団体に対する感謝状の贈呈。
- ⑦招待者及び学会員が一堂に会しての記念パーティー。
- ⑧その他従来学会大会の行事である個人研究

■ C アプリケーション

●会場案内表示デザイン

下記形体、寸法によるトムソン打抜きステッカーである。表面はスミ (大日本インク=D.I.C. 582・N2) とオレンジ (D.I.C.161・25YR6/16) のオフセット二色刷、コーティング。裏面は再剝離型式。会場にあたる金沢大学構内等に表示され、会場案内及び動線誘導を目的とした。場所によってはコミュニケーションメッセージや方向を示す矢印等のファクターも適時加えられた。

発表。この題数は598題(20会場)、専門分科会シンポジウム12題(12会場)、学会総会、体育関係諸器機ならびに関係図書の展示。等である。

因みに経費は収入の部25,882,982円、支出の部25,612,156円、差引残高270,826円であった。

■ B デザイン統合コンセプト

ベーシックエレメントとしてのシンボルマークに対して、第30回記念大会運営に関するアプリケーションエレメント構成に先がけ、次のコンセプトを設置した。

- ①学会シンボルマークが初めて制定された時であり、第30回記念大会という一大会色に拘束されることなく、あくまでも「シンボルマークの浸透」を第一義に置き、メインモチーフとして展開すること。
 - ②海外から多数の来賓及びオブザーバーの参加が予定されており、そうした状況にも充分適応できるものであること。
 - ③アプリケーションエレメントの核として、又エキジビションエレメントのメインとして、話題性豊富なイベントツールを設置する。
 - ④限られた経費及びタイムスケジュールの中で、広範囲かつ平均的素材の展開を計る。
- 以上のコンセプトに基づくアプリケーションエレメントをセグメントした。

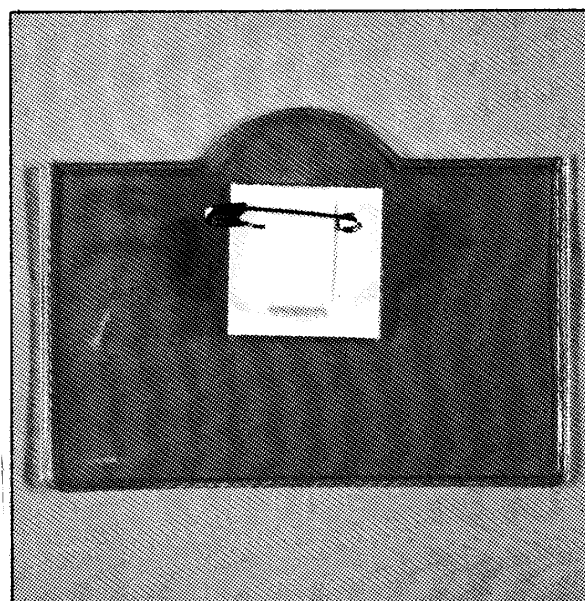
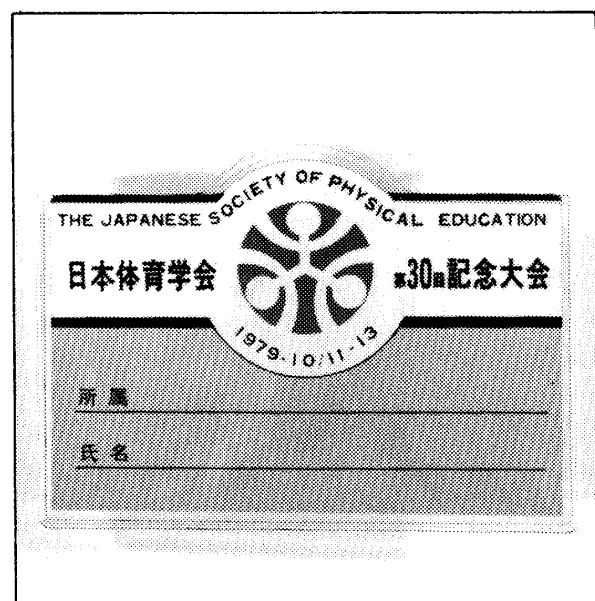
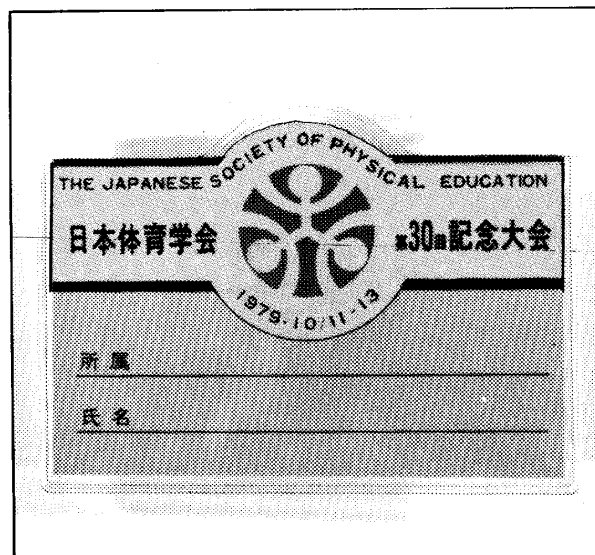


●ネームプレートデザイン

大会期間中、参加者全員が胸に付け、所属、氏名を明らかにする。透明硬質ビニールケースにクリップ及び安全ピンをセットした。プレートはトムソン打抜き加工による変形サイズで、製造工程はプラスされるが、シンボルマークを強調する為に、このフォーマットをとった。

◎スミとオレンジ（東洋インク＝CF5301・N2とCF5053・10R6/14）◎スミとブルー（CF5301・N2とCF5207・10B5/12）◎スミとブルーとオレンジ（CF5301・N2とCF5207・10B5/12とCF5070・7.5YR7/8）◎スミとブルーとライトブルー（CF5301・N2とCF5207・10

B5/12とCF5218・2.5PB7/6）◎スミとブルーとライトグリーン（CF5301・N2とCF5207・10B5/12とCF5147・2.5G8/8）◎スミとブルーとピンク（CF5301・N2とCF5207・10B5/12とCF5306・5RP7/10）で、各々コート紙に二色刷あるいは三色刷をした。文字その他レイアウトフォーマットは同一で、刷色変化（配色変化）による6種類のプレートを作成したのは、その配色によって会員用、実行委員用、外国招待者用……と参加者の立場、所属分類を示確にする為である。



●スポーツTシャツデザイン

ヤングマンを主な対象にしたアプリケーションとして、綿製のスポーツTシャツを企画した。多目的着用を意図し、シンプルなデザインをベースにしている。サイズのバリエーションは勿論のこと、シルクスクリーンプロセスによるレッド（5R5/14）とブルー（10B5/12）の二種類を用意し、選択の余地を持たせた。



●学会報デザイン

研究論文を収録したB5本文762頁に及ぶ学会報である。表紙は経費上の理由により厚手コート紙（L判19.5kg）にブルー（D. I. C. 183・5PB4/12）一色刷を余儀無くされた。シンボルマークをメインモチーフに平網10%～ベタに至るグラデーションをサブモチーフにしている。使用文字は写研，特太ゴシック体EG-KS，44級正体及び長体I，平体IIを用い，それらは白ヌキ文字である。



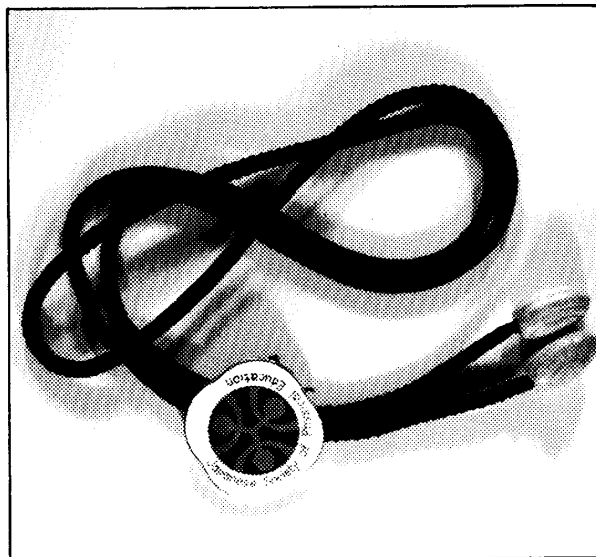
●報告書，プログラムデザイン

第30回記念大会運営における情況，資料等を網羅したB5本文32頁から成る報告書。総会及び研究発表，専門分科会シンポジウム等，大会における行事予定を案内したB5本文176頁から成るプログラム。いずれも学会報同様，一色刷仕様で，前者は皿六判110kgアート紙にスミ（D. I. C582・N2）で，後者は同紙にオレンジ（D. I. C 161・2.5YR6/16）で表現，文字関係も学会報に準じた。以上通り広報刊行物は同一レイアウトフォーマット，刷色変化によって，イメージの統合を計った。



●ループタイデザイン

七宝焼の技術によるホワイト及びブルー（10P B2/10）の二色着色と地金のシルバー色で表現された三色構成である。広い年齢層，広範囲に渡るコスチュームにフィットする様，デザインはシンプルな構成をねらっている。



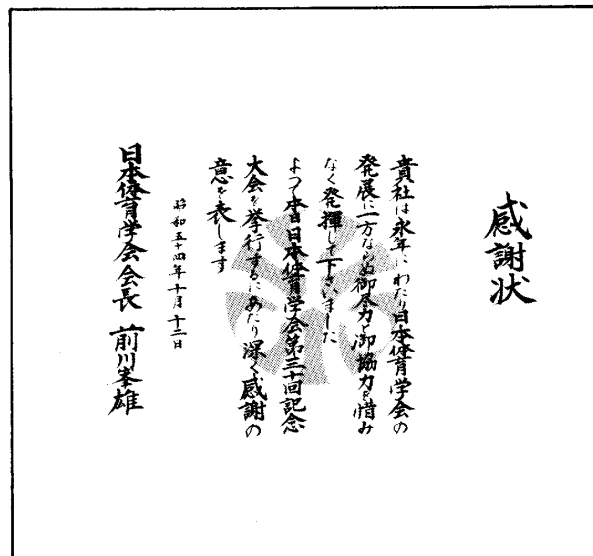
●パーティー券デザイン

総会后，懇親会の形式で催されるパーティーの整理券である。シンボルマークをメインモチーフに，カード紙（四六判 130 kg，ねずみ）に，スミ（D. I. C. 582・N2），オレンジ（D. I. C. 161・2.5 YR6/16）で二色刷をした。



●表彰状デザイン

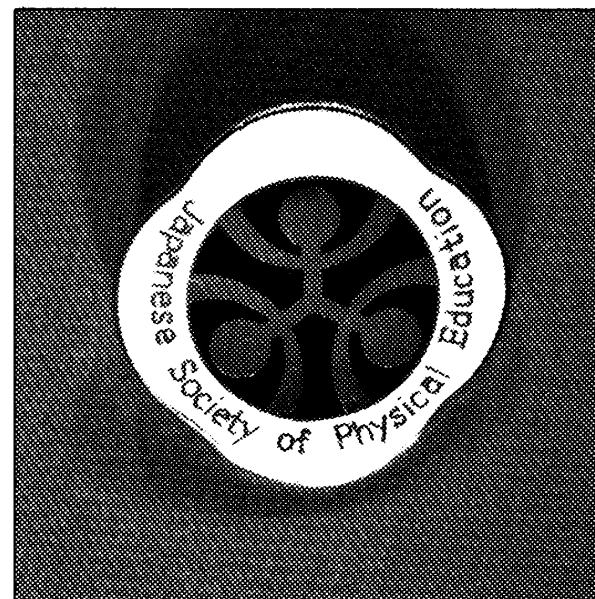
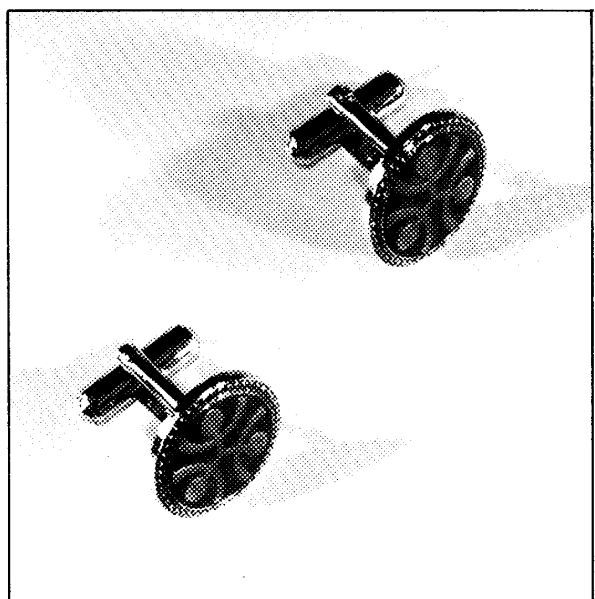
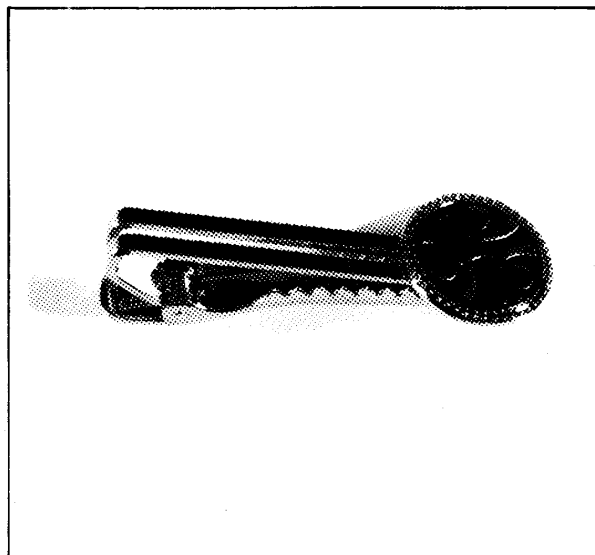
学会の第30回記念大会に因んで，今日迄に学会に対して功績のあった人物，団体，企業に授与される表彰状及び感謝状である。個性的素材を意図して加賀和紙を特注した。スミ（CF5301・N2）による文字の他，中央にグレー（CF5292・N7）で大きくシンボルマークを配し，シンプルな構成の中にも重厚さを加味した。



●カフスボタン、ペンダント、タイピンデザイン

話題性をねらいとしたイベントツールのメインは、液晶加工によるこの3品種である。デザイン的にはシンボルマークをそのまま唯一のモチーフにし、マークの性急な浸透をも狙った。即ち大会期間中は勿論のこと、大会期間外に於ても身につけられることが期待でき、いわば動くPRツールであろう。それらの特徴は手で触れると、あるいは紫外線に当てるとその時の体温、温度によって種々な色調に即時変化することである。その面白さ及び意外性により、シンボ

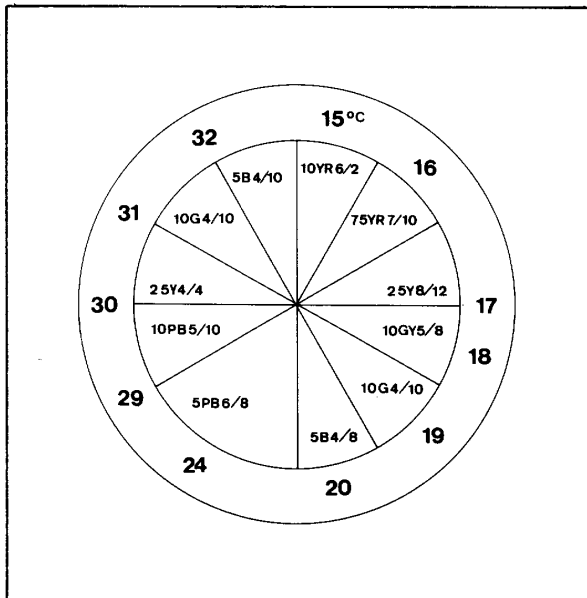
ルマークをモチーフにしながらも嫌味のないイベントツールであり、アクセサリともなった。



※液晶について

物質の大部分は温度と共に相転移点が変わると、形態あるいは物理的性質から、物質の状態が固体か液体か、あるいは気体かという様に明確に判別できる。しかし芳香族化合物、脂肪族化合物、多環状化合物等の有機化合物の中に、固体から液体に移行する中間のある温度レンジに限って、液体の様に流動的、且つ濁った状態で、光学的にも異方性しかも明らかに固体でもない特異な状態を示すものがある（現在約3000種の有機物質が確認されているという）これを液体結晶＝液晶と呼んでいる。この液晶は光、熱、紫外線、磁気、電気等にも非常に敏感に反応を示す性質を持っている。

中でも今回使用した液晶はコレステリック液晶と呼ばれ、低温側で赤色を示し、温度上昇と共に散乱波長が短波長側にずれて、橙、黄、緑、青、紫、の順に発色するものである。（図参照）現在、医学検査として人体の表面温度分布や体温の測定、室内温度計への利用、液晶印刷としての広告宣伝印刷物等、用途は急速に広がっている。



〔Ⅳ〕 あとがき

以上が日本体育学会シンボルマーク制定、及び第30回記念大会運営に関するデザイン統合プロデュースの概要である。もとより学会は利潤追求企業とは異なり、微々たる予算枠でのプロデュースであった。従って完全なデザイン統合からは程遠い段階である。しかしながらこれを基盤に、より完全な統合を目指して、次のステップに着手されることを強く望むものである。

参考資料

- (1) 日本体育学会会則
- (2) 日本体育学会総会資料（54年版） 55・10
- (3) 日本体育学会会員名簿 55・1
- (4) 日本体育学会第30回記念大会プログラム 54・10
- (5) 日本体育学会第30回記念大会大会号 54・10
- (6) 日本体育学会第30回記念大会報告書 54・11
- (7) 日本体育学会第31回大会プログラム 55・10
- (8) 日本体育学会第31回大会大会号 55・10
- (9) 体育の科学（杏林書林） 54・12
- (10) 体育学研究第25巻1号（日本体育学会） 55・6